

矢作川の流域における祭礼と服装についての調査（第2報）

龍山寺の鬼まつり

枋原きみえ・齊藤一枝・坂倉園江

菊山弘子・芥木敦子・戸田光子

菊地真理子・原 淑子

Investigation on the Festival and Costume in the Basin of River Yahagi (Part II)

by

Kimie TOCHIHARA, Kazue SAITŌ, Sonoe SAKAKURA,

Hiroko KIKUYAMA, Atuko SAIKI, Mituko TODA,

Mariko KIKUCHI and Toshiko HARA

緒 言

矢作川の中流地域の祭礼の服装については、上流の“稲武町の稲橋のまつり”中流では“足助のあやどおとりと夜急仏”“猿投地方の棒の手”をとりあげて調査をし、第1報として報告したが、更に同じ中流地域にある岡崎市の“龍山寺の鬼まつり”は当地方に一大奇祭として知られ、その服装についても興味あるものが多いので、調査をした。その結果を第2報としてここに報告する。

調 査 方 法

祭礼と服装を調査研究するためには、その土地の地勢、風土、交通、歴史的文化などを知ることか必要であろう。そこで筆者等は、まつ、関係図書によりそれらの予備知識を得た。

1963年より1965年にかけて祭礼当日など数回に渡り現地に行き、祭礼の服装と祭事の実態を調査し、その模様を撮影した。

さらに平面にした衣裳をカラー写真により、色彩、柄、形態をとらえ、なお実物衣裳の各部分については、綿密に採寸をして、平面図を作製した。祭事の内容については、龍山寺住職、祭礼関係者、占老などに聞きとり調査を進め、不明の点を明らかにし、事実の確認をした。更に服装史と照合して、服装の歴史的考察を試みた。

まつりの概要と起源

龍 山 寺 愛知県岡崎市龍町字山龍

祭 礼 日 旧暦1月1日～7日

愛知県無形文化財指定 昭和29年7月

起源と沿革

瀧山寺のまつりは天下泰平五穀豊穰を祈る修正会が瀧山寺の本堂において行なわれるが、祭事は仏前法要、鬼塚まつり、庭まつり、鬼まつり、行列などである。その中で最も華やかな鬼まつりをとりあげて一般に瀧山寺の鬼まつりと総称している。

鬼塚まつり、庭まつり、鬼まつりは、結願の日の7日の夜に行なわれる。



図1 瀧山寺鬼まつり

鬼まつりの起源については「口碑に源頼朝公の祈願に始まり毎年勤修す」とあり、また、瀧山寺“御宮勧請由緒記”に「正保4年極月江戸東叡山塔中青竜院亮盛え（瀧山寺住職）今年より毎年瀧山寺に至り天下安全の御祈禱勤修執行可仕旨、將軍御前において仰せ渡され、御手ずから御昆布下され、道中人馬御朱印呉服黄金など拝領す」とある。瀧山寺が隆盛をきわめた鎌倉時代に始められたものが、室町時代の末期に至り廃止され、さらに3代將軍家光時代に再興されたが、その後明治4年（1871年）に一旦中絶し、同21年に復興して今日に至っている。

この鬼まつりが幕命によって行なわれていた頃は、その儀式は厳肅豪壮で参詣人は厳寒期にもかかわらず、手拭をかぶり衿巻をつける者はなく、また暗夜であっても提灯を用いる事を禁じたという¹⁾。このことは、修正会法要が、いかに権威があったかを物語るものであろう。

起源についての考察

修正会がはじめられた鎌倉時代と前代の平安朝時代について、その歴史をたどると、平安朝は藤原氏一族が、栄華を極めた時代で、公家は詩歌に興じ、優雅を尊び、当時の祭典は空前絶後の美を創造した時代で、年中行事の中心は、宮廷であったと云われている。

当時の武家は、武骨者として、公家より卑まれ、武家や、民間は公家のなす行事の一部をならったに過ぎない時代であった。

その後藤原一族の栄華の夢が破れ、更に平家の滅亡により、源頼朝によって鎌倉幕府が開かれた。鎌倉時代になると、公家の古典的な貴族階級と新興武士との相互対立、文化闘争が行なわれつつ、武士の社会的活躍に伴って、質素、勤儉、実用を奨励し、武勇を尊ぶ風潮に次第に移行して行った。この時代は上流階級の廃退による中流階級の実権掌握の時代とも云えるであろう。

この鎌倉時代に瀧山寺の修正会が、厳肅豪快な祭礼として、はじめられたことは武家政治の時代的性格を反映している例として興味あることである。

なお当時、再々あった天災のために一般民衆の生活は窮乏し、現世をはかなみ、隠遁する者が多かったと云う。そのような民衆の不安は必然的に日常生活、その他に迷信が織り込まれるようになった。鬼は古くから伝説、迷信の中に語られ、時代の思想によって多種多様に変化している。“日本書記”の中では邪鬼、姦鬼、仏教伝来後は修導者を守護する怪人など、平安朝に入って仏経中の餓鬼、地獄の獄卒など。鎌倉時代にも迷信その他の中に鬼は活躍したと記されている²⁾。瀧山寺のまつりの中では、五穀豊穰を祈るよい意味の鬼として扱われている。

当時の宗教は藤原氏時代の浄土宗に変わって新たに渡来した禅宗が栄えた時代であるか、瀧山

寺は平安朝時代に開宗された天台宗をうけついでいる。当時の僧徒は純信仰的生活と、社会的活躍をした二面があったと言われているが、一般民衆の純宗教的意識の低下により、法会にしても、それを劇化することによって法味以外に参詣人の興味を満足させると云う傾向が平安時代から続き、鎌倉時代には更に、その傾向が強かったと云う³⁾。

宗教の劇化、芸術化の風潮は瀧山寺の修正会にもとり入れられ、剛快な鬼まつりか当時の民衆にアピールしたことは、疑うべくもないことであろう。

当時は武勇を尊ぶ一方、人心の不安と生活の窮乏は、食生活を支える農業に深い関心がむけられ、五穀豊穡をねがう民心の現れとして、宗教と結びつけ、法会の中に庭まつりの行事かとり入れられたのであろうと推定される。

結 果 と 考 察

祭事および服装

1. 行 列

將軍家の命により瀧山寺の法会勤修が行なわれた当時は、前年の12月18日に学頭（住職）以下36人の一行が、江戸の東叡山を出発し、瀧山寺に至る道中行列を行ったということである。道中における学頭の権威は非常に高く、普通の大名は、途中に出合うことを避けたという。

この道中行列は、明治維新に至って廃止された。従って祭礼の盛大さを欠くようになったので、明治21年に復興以後は、鬼まつりで活躍する“谷の12人衆”（一村落から一人ずつ選ばれて仏に奉仕する12人）は、一週間（現在は2日間）一定の場所に合宿し、食事についても、祭礼当日の衣服の着つけも自ら行ない女性の手をわずらわさないという厳しい風習がある。この12人衆を中心に瀧山寺住職や、村の若者達で行列を行うことになった。（瀧山寺住職、山田光隆氏談）

この行列は修正会の最終日に行なわれる祭事の一つで、黒紋付の羽織、袴姿の“大役”が先頭にたち、背にそれぞれ鬼面を描いた白木綿の法被に白いパンツの若者大勢が、白足袋に草鞋がけ、頭には、ねじりはち巻で、まつりに使用される大松明をかついで進む。

“若徒”^{わかと}2人は黒木綿の紋付長着に、青地に白の水玉模様の袴^{かち}*⁷⁾（図2）をつけ、小刀をさしている。法会の時には住職の前に控えて小性の役目をする。

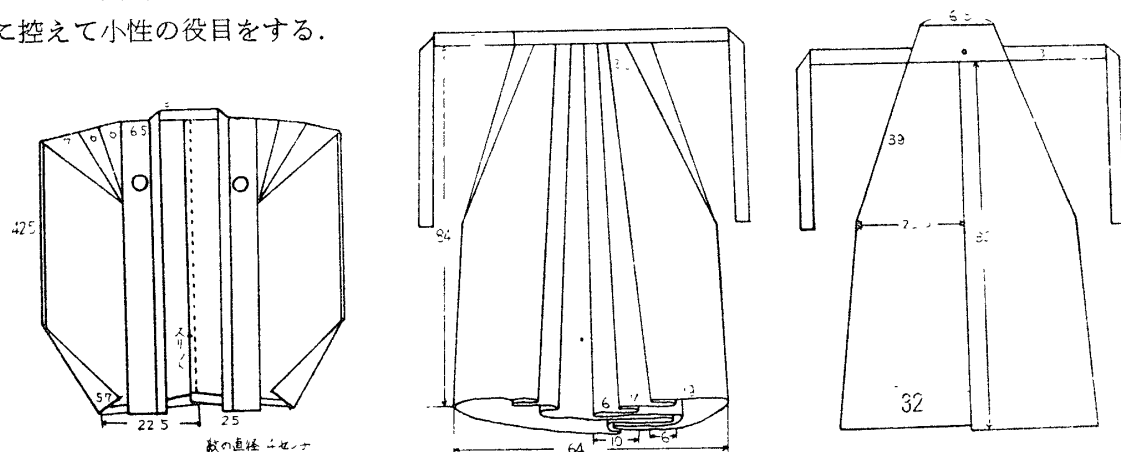


図2 鬼まつり
（若徒の衣裳）

“瀧山寺住職”は七条という薄金色の僧衣(図3)をまとい、黒紋付羽織袴姿の従者が紙張り長柄の大傘を住職にかさしなから進む。

火まつりで鬼役になる3人は、行列の際は白木綿の袴を着ている。

12人衆は“東次郎、西次郎”“小局、福太郎”“火打”2人の順序で行進する。

“下役”の6人は白木綿の長着に緑色の“**あおもくさ”を着用し、黒色の***侍烏帽子をつけて、草鞋をはき、丈余の南天をつきながら行進する。

* 袴⁷⁾

室町時代の末から武家の用いた袖のない露頂の肩衣^{かたきぬはかき}が形式化したもので、江戸時代になって武士の公服となった。やがて公家侍、寺社に仕える雑士などの公服となり、庶民も婚礼や葬礼には麻袴を用いるようになった。上流武家の礼装は、長袴といって長袴を組み合せ、一般武士や庶民の礼装は、半袴(足首までのもの)と組み合せて半袴を用いた。享保の頃からは、武士日勤の服として用いられたが、農、工、商の人々はその着用を許されなかった。家紋は^{おくみ}裾の左右と背の縫い目前後につけられる。寺社に仕える雑士が用いるようになったのは、江戸時代という。

**あおもくさについて(図4.5.6)

この名称の由来については、祭礼関係者から明確な解答を得ることが出来なかった。

“あおもくさ”という語は被服史にも見当たらない。しかし、“あお”(襖)という語は平安最盛期までの一般用語で、「あらゆる衣服のしたに着るもの」「衣服と衣服の間に着るもの」「袴の中に入れて着る民衆の衣」など諸説がある⁴⁾。また被服史に「襖直垂^{あおひたたれ}」などの用語もみられる。“もくさ”は、よもぎのこと、又は藻草(水中にある)とも解釈出来るので、緑色の衣すなわち“あおもくさ”と名づけられ、云い伝えられたのであろう。

あおもくさの上衣の形態は素襖^{すおう}から変形されたものと思われるが、前身頃の裾から肩にかけて内側3.5cm 外側2.5cmの深さのダーツが



図3 行列(瀧山寺住職)



図4 鬼まつり
下役の衣裳(あおもくさ)

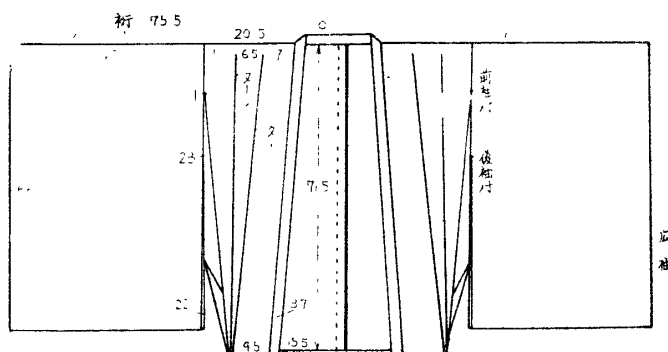


図5 鬼まつり
下役の衣裳(あおもくさ)

酉の刻（午後6時）に学頭はじめ天台宗の各僧七条という僧衣を着て、若徒2人、^{ぼうつき}棒突8人（瀧山寺の紋入り濃紺の法被を着る）を従えて本堂に出勤する。棒突は^{かし}棒の棒を持ち警護にあたる。大役が谷の衆12人に向い「谷の衆^{おつつけごせん}追付御前のおいででござる」と呼ぶと、学頭一行外陣正面に出て火打（図7）（瀧山寺の“瀧”の文字入りの法被を着る）が御幣に打火して12人衆が「お祝」というと学頭一行内陣に入り、法会が始められ、阿闍梨^{あじやり}（高僧、戒師、教授の意）が供物をもって鬼塚に至り鬼供の作法をする。東次郎、西次郎は山王権現、東照権現の宝前において長力を振る。法会は幾多の読経によって進められる。

東次郎、西次郎はいつでも黒の*綿ピロードに白線入りの**^{とうき}胴服（胴着）⁷⁾を着、（図8.9.10）赤味色の***錦織（菊立涌模様）の股引をはき、腰には白木綿（晒）のひもをしめ、赤色木綿の脚半と腕貫をつけ、頭には、赤色、絹のはち巻をしている。この衣裳は、明治維新後に作られたものと云われ、^{らそつ}羅卒服⁷⁾に似ている。

* ヒロードについて

ヒロード⁸⁾はポルトガル語の **Velludo** スペイン語の **Vellude** から訛ったものであると云い、ピロードが我国に初めて渡来した年代は明らかでないが、室町時代後期にはすでに渡来していたものと推定され、京都では、正保、慶安（1644～1651）頃に和製が出現したと云われている。東次郎、西次郎の服にいつから用いられたか明らかでないが、古くから使用されていたのではないかと推定される。

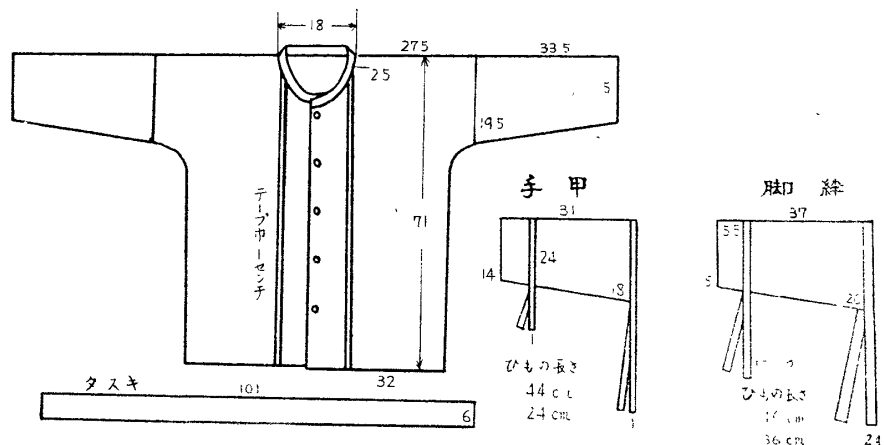
**胴服について⁷⁾

胴服のはじめは、8代將軍吉宗の“享保の改革”による洋書解禁以後兵学の改良と共に西洋の火気取扱いに便利な筒袖、裁付袴を用いた（18世紀後半）のに始まる。その後ペリー来航（1853年）は軍装の上に大きな影響をあたえ、慶応年間にアメリカの鼓笛隊をまねて銃隊の一部にそれを採用した。明治3年（1870年）になると、太政官、海軍、陸軍が制服を制定し、^{えきていりよう}礼服、軍服がすべて洋服になるにつれて、^{えきていりよう}駅通寮、鉄道寮、羅卒などが洋服を採用するようになった。これらの階級、所属

を表わすものとして、^{きくとし}菊綴、肩章袖印、あるいはその他の飾り、色などが使われた。維新後作られた東次郎、西次郎の胴服は羅卒服と、形がよく似ており、白線は階級所属を表わすものからヒントを得て装飾として用いられたものと思われる。



図8 鬼まつり
（東次郎西次郎の服装）



79 鬼まつり

（東次郎の衣裳）

***錦織について

錦織については既に古くから、
 醍醐天皇記中に「錦の衣^{きぬぼかま} 禪を脱
 いで与う」なとあり、その後他
 の呉服と共に発達して貴重なもの
 とされていたり。現在、東次郎、
 西次郎の衣裳に使用されているも
 のは木綿地の錦織ふうのものである。

3. 庭まつり

鬼塚まつりが終ると、「庭まつ
 り」がはじめられる。庭まつり
 は田遊びまつりともいわれ、五
 穀豊穡と子孫繁栄を祈願する祭
 礼で、まず大役外陣の正面に出

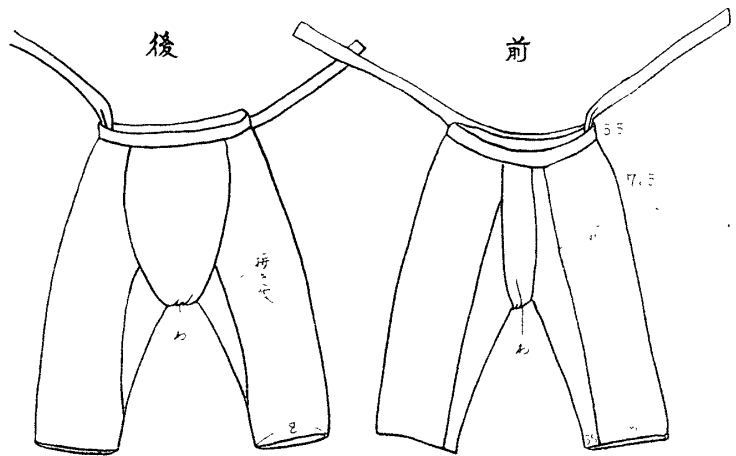
て、「谷の衆」と呼ぶ。12人衆「えー」と「答える。大役「行儀をよくなされ、ただ今御前のおい
 ででござる」と云うとやがて学頭外陣正面に出て着座し、天台宗の各寺院の僧が背後に着座す
 る。大役「東次郎おーん、そー、そー」（早く早く、と促す意）と呼ぶと、東次郎が出て来て長
 刀を振り、東に西に走り廻り東の悪魔を切って退場する。次に西次郎が西の悪魔を切って退場
 すると、小局が出て来て「あっぱれところや、よいところ年明け春來たり、農時近うなったり
 ——やがて年々の吉方に向って福太郎を呼んでひっかけ打って参らしょう」と云い、「福太郎
 ー」と呼ぶ。小局と福太郎は本堂正面に並び、かついでいる鍬をカチリと当てて、小局「あっ
 ぱれところや良い所」福太郎「よいところ」と、地を打つ真似を3度くりかえす。

鎌倉時代の奇妙な言葉のやりとりと所作か、この
 あと続けられる。小局と福太郎は、現在で
 は、浅川信太郎氏、中根武男氏が先祖より受けつい
 てこの役にあたる。

服装は（図11. 12）黒地に朱色の^{きんさ} *更紗模様の長
 着を着、白地に黒の棒縞木綿の袴をはいている。こ
 の袴は、襷の取り方が左右アンバランスになっている
 点が普通の袴と違っている。

頭には、赤色木綿の^{ひもづきん} “紐頭布”（図12）をかぶりそ
 の上に侍鳥帽子をかぶっている。同じ木綿の“たす
 き”を肩より斜にかけるが（図11）のように小局は
 右肩に、福太郎は左肩にきめられている。（祭礼関
 係者、浅川信太郎氏談）

現在の衣裳は昭和のはじめに作られたものという
 が、瀧山寺伝記によれば、『昔は素襖を着ていた』と
 ある。素襖¹⁰⁾は鎌倉時代になって平安時代の垂直
 から、材質を麻に、露紐を皮紐に変えて用いられた
 もので、この素襖がいつ姿を消したかは、あきらか



40 鬼まつり

東西次郎の衣裳)



図11 鬼まつり
 福太郎、小局の服装

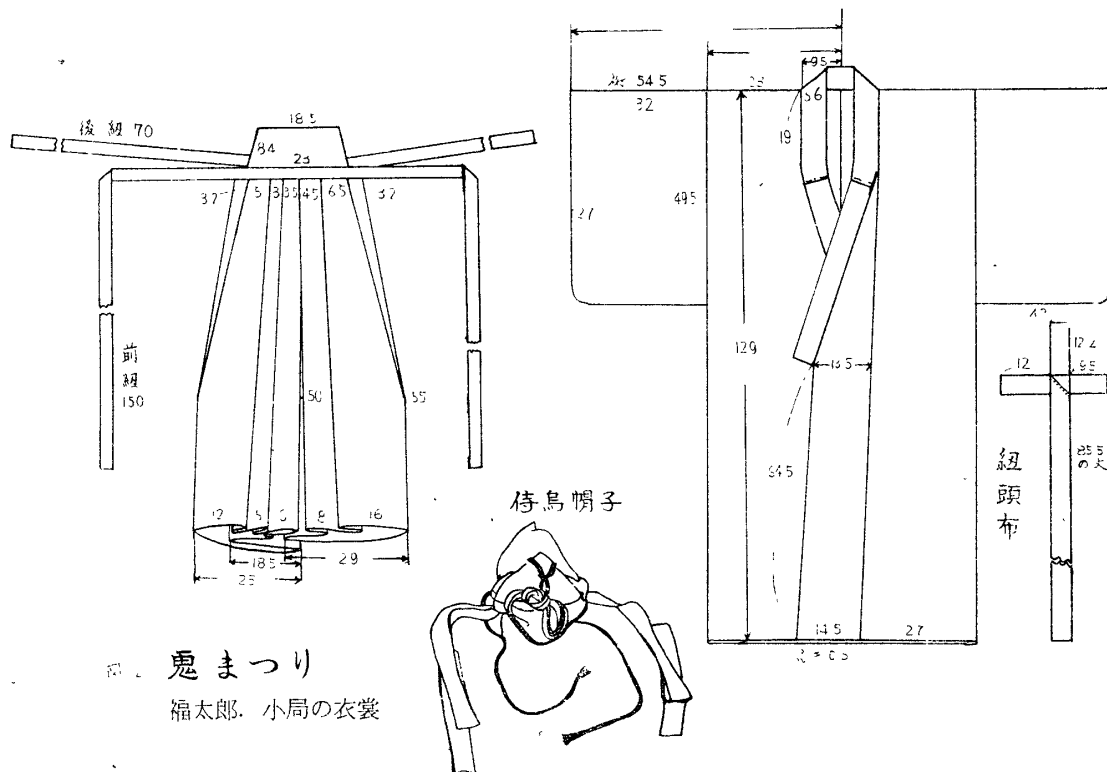


図1 鬼まつり
福太郎、小局の衣裳

にされていない。

歴史の移り変りとともに、この素襖から小袖に、小袖から袷長着にと形態が変えられて行ったのであろう。

* 更紗

更紗¹¹⁾の語源はポルトガル語説、インドの地名説、シャワの古語説などあるが、明らかでない。日本には室町時代の末に輸入されその技法は日本の染色に大きな影響を与えたと云う。

更紗が福太郎、小局の衣裳として、いつ頃とり入れられたか明確にされていないが、室町以後、相当古くから用いられたとも考えられる。

4. 鬼まつり (火まつり)

鬼まつり(図1)は、庭まつりに続いて行なわれる。もうもうたる*大松明を倒して火を消すと、あたりは一瞬暗夜となる。その時、本堂の内陣では半鐘、隻盤、大鼓を乱打し、ほら貝を吹き鳴す。この音を合図に“手引”に導かれた祖父面、祖母面が、松明をもった数十人の若者と、ともに外陣に走り出る。祖父面は^{おおまさか}大鉞と松明を、祖母面は、^{せきばん}撞木と松明を持ち、おのおの浜椽と外陣との間を松明とともに数回走り廻る。孫面は、小鉞と松明を持ち、前面四方の^{きぼうしゆ}擬宝珠を廻り、欄干を走り渡る。夜空を焦さんばかりに燃えさかる猛火の中に、怪奇な形相の鬼面が浮かび、右往左往し乱舞は続けられる。そのさまは、勇壮豪快の極みである。

鬼を配した祭礼は各地に催されているが、龍山寺の鬼まつりは、庭まつりとともに一定の作法があつて厳粛な中にも、品格があり、源頼朝公の祈願に始まり、幕命によって行なわれたと云う風格が、今なお受けつがれているように思われる。

まつりで鬼面をかぶるものは、7日間斎戒沐浴をして別室で起居し女子を近づけないことは、12人衆の場合と同様である。

祖父面，祖母面をかぶる者は昔は本堂番大役があたり，松田大隅，中根丹羽の2人かかぶっていた．孫面は一山寺中の小僧がかぶったと伝えられている．明治21年以降は祖父・祖母面は42才，孫面は15才の村内の厄男が希望によりかぶることになった．（祭礼関係者，中根武男氏談）（図13）この鬼面はどれも，運慶の作といい伝えられ，起源当時

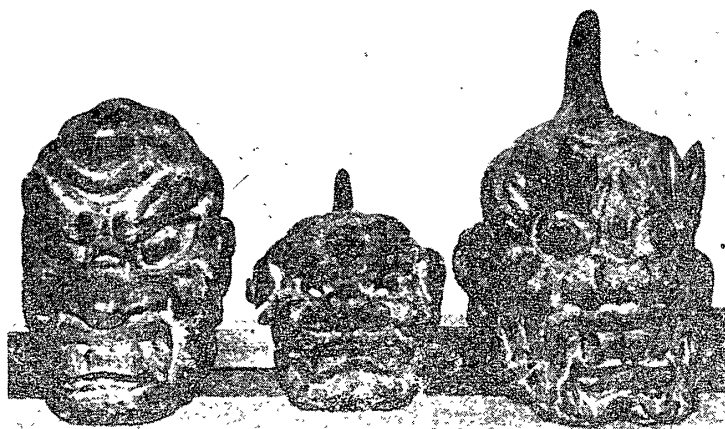
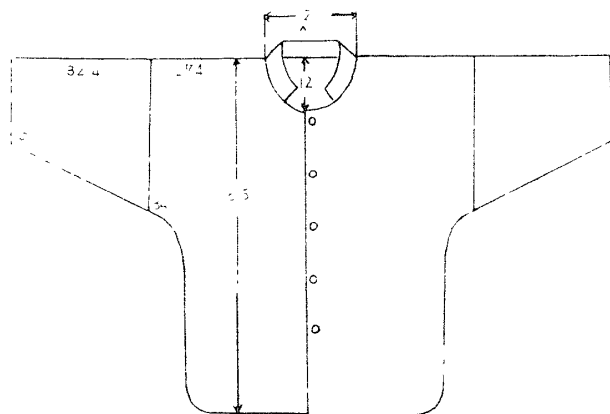


図13 鬼の面

は，祖父・祖母・父・母・孫面の5つの作品があったという．父面，母面については，伝説があり，その昔，三河鳳来寺の旅僧が，身に汚れはないというて，無理にかぶり，まつりを行ったところ，面かはなれず，息がつまって，遂に死んだという．人々はあわれみ，この者を本堂の前に葬ったといい伝えられている．これを鬼塚と呼び，今なお鬼塚まつりか行なわれている．なお別伝，別説があるが，真偽のほどはわからない．（当地古老談）

* 大松明について

火まつりに用いられる松明（図14）は，昔は松を乾燥して最も油の多い芯のみを使用したというが，現在は松材の不足から真竹を代用する．1.5cm～2cmに裂いた竹を70cmの長さにし，中に松芯（松の根を乾燥したもので油が多い）を入れ，縄で12ヶ所しぼる．うるう年は13ヶ所をしぼるという．なお，松明は大，一般用，鬼の持つものと三種に分けて作られる



鬼の服装

鬼まつりに用いられる鬼の服装は，^{とう}胴服^びと（図14）袴からなり，上・下とも総裏付きである．胴服は真紅のビロードで作られていて，東次郎，西次郎の胴服と似ている．下につけるこげ茶色のビロードの袴は（図15）瀧山寺の鬼まつり独特のもので，後に袴の腰板がつけられ，両脇には三角の襻がある．膝の後部には孤状の切り替え線があり，大きなふくらみを出すための皺と襷が多量にとられている．前部にもゆとりがとってあり，鬼の乱舞における膝の屈曲を助け，その機能性を十分に考慮して作られている．このシルエットのかもし出す形態のおもしろさと色のコントラストは鬼の怪奇さを

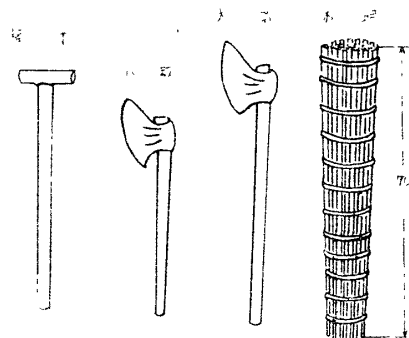


図14 鬼まつり
鬼の衣裳（胴服）

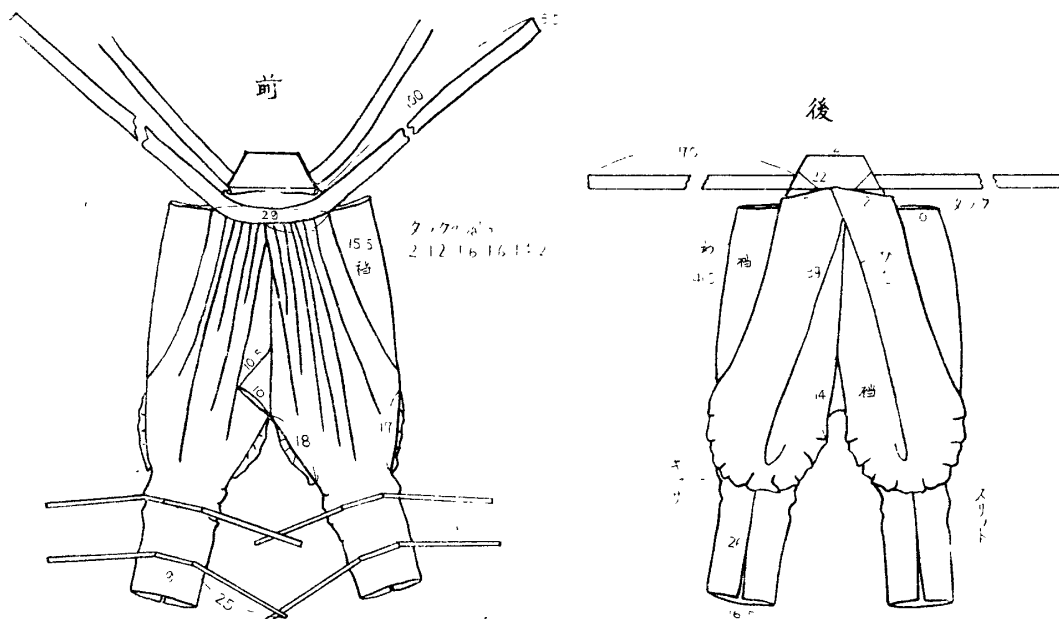


図15 鬼まつり
鬼の衣裳 袴

強調し、当祭に趣をそえている。

この袴は当時の祭礼関係者が、室町時代の末期頃に用いられた*裁付袴¹²⁾からヒントを得て考案したものと思われるが、服装史においても、同一形態を見出すことが出来なかった。なお、手と足には、胴服と共布で作られた脚半と腕貫をつけ、足にはわらじをはいている。

現在使用されているものは、昭和33年に昔の衣裳を形どり作られたもので、それ以前に作られた赤いラシャ地の胴服と黒茶色のビロードの袴は、瀧山寺に保管されている。古い胴服に使用されているラシャの語源は、オランダからもたらされた毛織物のラッセンから訛ったもので、室町末期に輸入されたと言われているので、このラシャは鬼まつりに相当古くから取り入れられていたのではないかと推定される。

* 裁付袴¹²⁾

天文以来日本に來朝したスペインやポルトガル人によって、南蛮風俗が日本の服装の中にとり入れられたが、その中に輕衫^{かるさん}があり、この輕衫から裁付袴が出来たといわれているが、膝から上がふくらみ、下は脚半風になっていて、この両者の区別はほとんど不明である。

結 語

以上瀧山寺のまつりと服装について報告したが、瀧山寺の鬼まつりは公家中心の平安朝時代から、武勇を尊ぶ鎌倉時代の武家政治へと移行した歴史的な大變動の時代相を反映して、公家により抑圧された、当時の武将及び民衆の爆発したエネルギーを見事に表現している祭礼といえるであろう。

瀧山寺のある岡崎市は、西に矢作川をひかえ、西部及び南部は沖積層で、良質の土壌に恵まれ、農産物も豊かである。交通の便もよく、江戸時代300年を通して、東海道五十三次の宿場の一つとして栄えた。また徳川氏や多くの勇将の発祥の地として、歴史的な由緒をもち、多くの神社・仏閣が散在して民衆の信仰心も厚く、なお平安、鎌倉時代より、仏像・仏画・建築など幾多の文化財を残している。岡崎市はこのように文化都市として繁榮して来た。瀧山寺のま

つりが現代に至るまで、年々盛んとなる傾向にあることは、このような好条件が基盤となっているのではなかろうか。まつりの衣装は、それぞれ役柄に適合した機能的な形態がとり入れられ、被服史にも見当らない新しい工夫をこらしたものも見受けられた。特に鬼の用いる袴はきわめて特異なデザインで、古くから造型上の創作的意欲と、美的意識が優れていたことは、先に述べた多くの美術作品によっても、うなづける問題である。

なお、当地方は三河木綿の発生の地であり、祭礼の衣裳はほとんど木綿地で絹地は紐類に使用されているにすぎないことは、鎌倉時代の質素・勤儉奨励の世相の反映と、手近に得やすい材質を使用したことによるものであろう。このように材質はきわめて質素であるか、古い伝統を思わせる品格のある形態の衣裳が含まれていることは、この祭礼の特色といえよう。まつりの服装を調査するに当たって、起原当初の服装について明らかにすることが出来ず、推察の域に止まったものもあったことは遺憾であるがしかし当地の郡誌や、県史、その他郷土史的な図書にもふれられていなかった問題を、現在保存されているものについては明確な記録をし、また被服史的な考察を加えたことがまつりとその衣裳の伝承上、重要な資料としての役割を果たすことが出来たら筆者等の幸とするところである。

終りにこの調査にあたり御協力頂いた岡崎市役所社会教育課の諸氏、瀧山寺住職山田光隆氏、当祭礼関係者浅川信太郎氏、ならびに中根武夫氏に深甚の謝意を表す。

引用文献ならびに参考文献

- 1) 岡 崎 市：岡崎市史八巻（1930）
- 2) 江 馬 務：日本風俗文化史（1957）
- 3) 坂 井 秀：鎌倉時代の風俗（1951）
- 4) 高橋 健 自：歴世服飾図説（1929）
- 5) 室 松 岩 雄：近世風俗志（1915）
- 6) 岡 崎 市：瀧山寺伝記（ ）
- 7) 遠藤 武他：日本服装百年史（1962）
- 8) 坂本太郎他：風俗辞典（1961）
- 9) 永 島 信 子：日本衣服史（1943）
- 10) 江 馬 務：日本服装小史（1960）
- 11) 下 中 邦 彦：世界大百科辞典（1962）
- 12) 日野西資孝：日本服飾史（1953）

註、衣裳の色彩名は財団法人日本色彩研究所編「色名帖」による。